2014年
6月17日
火曜日

ロボットと人間

根岸　紳　教授（経済統計学）

ロボットの記事が毎日のように新聞に登場する。産業用ロボットだけでなく医療、介護、災害救助、話し相手をする各種サービスロボットなどが身近になってきたし、低成長の日本経済の起爆剤になるかもしれないという希望も多く語られる。また人工知能をもったロボットや人間そっくりなヒューマノイドのロボットも登場し、病院や百貨店の案内をするという。そんな中、ついにロボットvs人間の対決が行われた。将棋の戦いである。新聞に次のような見出しが踊っていた。「人類、今年も苦杯」。これを読み、いささか違和感を覚えた。そもそもこのような対決に意味があるのだろうか。人間であるプロ棋士とコンピュータソフトを搭載したロボットの対決であり、「将棋電王戦」と呼ばれている。本来、将棋は相手の目を見、相手の息遣いを感じながら、勝負をするものである。お互いに相手の心持ちを探りながら、持ち時間の中でじっくり時間をかけて行う生身の勝負であるところが将棋や囲碁の戦いなのではないだろうか。全人格をかけて戦う勝負であるはずだ。人間同士の将棋名人戦七番勝負を見つめていたふたりの歌人は、「非日常　肉体的圧力の勝負」「沈黙の痛さ　気の闘（せめ）ぎ合い」こそ将棋であると実感している（朝日新聞２０１４年５月21日朝刊）。棋士の実力を鍛えるためにロボットが活躍するのはよくわかるし、将棋ソフト同士の開発競争が行われているがこれはうなずける。ロボットはあくまで人間をサポートする存在ではないだろうか。

東日本大震災の時、産業用ロボットでは世界のトップである日本が災害現場や汚染現場で日本のロボットが活躍できなかったことが、日本、とくにロボット業界やロボット学会では大きなショックとしてとらえられていた。しかし、これをきっかけに、その後、災害用のロボットが日本で飛躍的に進歩し、実際の現場で活躍しだしている。介護や医療の分野でも、イノベーションによって、例えばロボットスーツが普及しつつある。ロボットスーツＨＡＬを着用して歩行困難な人が歩けるようになり、機能回復にも役立っている。このＨＡＬを活用したトレーニング施設も各地にでき始め、さらに、ロボットの事故に対する介護ロボ保険も出てきた。ロボットスーツは人間に役立つ財であり、経済学の用語を使えば、ロボットと人間は補完財の関係にあり、決して代替財の関係ではない。しかし、産業用ロボットもITと結びつき、目覚ましい発展を続けており、工場では人間の姿が少なくなってきた。ロボットは雇用を奪うのであろうか。そうではないだろう。ロボットにはできない人間本来の仕事の分野が増えていくことが予想される。サービスロボットの分野では、介護や医療の現場とともに高齢者ら弱者の生活を支えるロボットに期待がかかる。ロボットは高齢社会の救世主になるか。前期高齢者の仲間入りをした私にとって、将来が楽しみである。■